

教職大学院における評価の力量形成 —実習と省察の可能性—

徳永俊太

大学院連合教職実践研究科学学校臨床力高度化系

1. 教員養成における教育評価

筆者が修了生のフォローアップに行くと、修了生から教育評価に関する悩みを聞くことがよくある。ここでいう教育評価には、教科指導だけではなく、生徒指導的な側面も含まれている。昨今では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価にも教育界の関心が集まっている。しかし、2023年現在、教員免許を取得するための科目として、教育評価に特化した科目は存在しない。文部科学省が定める「教職課程コアカリキュラム」においては、各科目で教育評価の力量を付けることが求められている。例えば、「カリキュラム評価の基礎的な考え方」、「主体的学習を支える動機づけ・集団づくり・学習評価の在り方」、「当該教科の学習評価の考え方」といった記述が見られる。つまり、教育評価の力量は、各科目の中で身に付けることが求められているのである。

教員養成課程における教育評価の力量形成に関して、今回のフォーラムでは二つの課題を指摘した。一つは、長期的・継続的な見通しをもった教育評価の経験をカリキュラムの中に用意することが難しいことである。もう一つは、「教員課程コアカリキュラム」に示されたような個別的な評価に関する力量を統合する経験が明確になっていないことである。本発表では、後者を精密に作り上げた部品を機械に組み立てて動かす過程になぞらえた。

2. 長期的・継続的、多面的・多角的な学校への関り

2022年度から学校臨床力高度化系初任期教員養成コースで始まった学校臨床専門実習Ⅰは、上述した二つの課題に応えうる可能性を持っている。これまでの教職大学院の実習が特定の時期の連続した日で行われていたのに対して、学校臨床専門実習はそうした従来の実習（通称集中実習）に加えて、年間を通して毎週水曜日に行う実習（通称水曜実習）を行う。水曜実習によって、院生は長期的・継続的に学校に関われることになり、子どもの変化を見取る経験を持つことができるようになった。さらに、集中実習と水曜実習では院生が担当する業務が異なるために、教育実践を様々な面から見る経験にもなっている。これは、個別的な評価の力量を統合していくことにもつながるだろう。ただし、ほっておけば自然と統合されると考えるのは楽観的であり、大学院の授業で省察を促していく必要がある。

3. 統合を目的とした教職大学院の授業

教育評価に特化したわけではないものの、統合を促す教職大学院の授業についても紹介した。実務家教員である吉川孝と徳永が担当する「現代的教育課題の教材化と授業実践」は、大学院で学習した様々なことを整理し、統合することを目的とした科目である。授業の実施時期は修士2回生の後期で、院生にとって大学院の締めくくりの科目でもある。授業の大きな流れは以下の図1のとおりである。

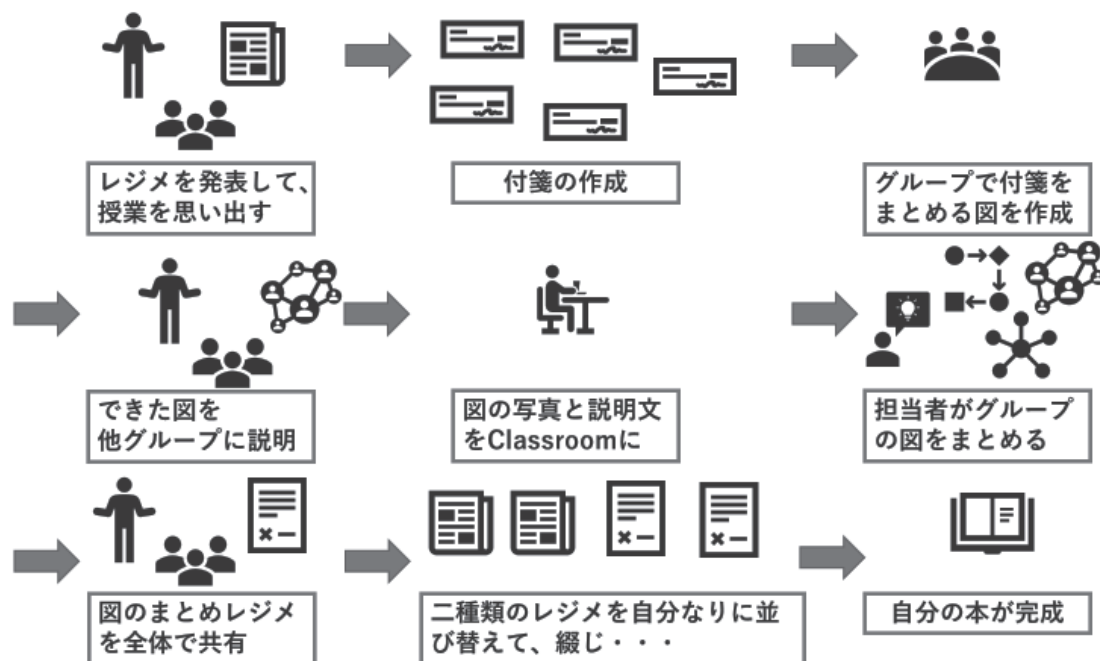


図 1 「現代的教育課題の教材化と授業実践」の流れ

この授業では、大学院で受講した科目を取り上げて、そこで学んだことを他の様々なこと、例えば実習の経験、他の科目の内容、自分の興味・関心事などと結びつけて整理をし直すことが核となっている。振り返りはA4裏表のレジメに代表者がまとめ、最終的には配られたレジメを整理し、各人が自分の本を作成する。2022年度は前年度から振り返りの仕方を変更し、KJ法とGoogle Classroomを用いて、自分たちの思考が具体物に残るように工夫をした。この学習活動の大きな目的は、自分なりの系統性を持って学んだことを整理することであり、院生には「自分の本棚を整理して、いつでも本が取り出せるようにする」という例えを伝えている。こうした学習経験は、個別的な教育評価の力量だけではなく、教員に必要な様々な力量を統合することにもつながるだろう。

4. 協同の重要性

長期的・継続的な見通しを持つことや力量の統合を行うことは簡単ではない。それゆえに、他者に支援してもらうことが重要になる。自分の評価行為をしっかりと記録し、他者と協同して自分の行為（経験）を再解釈する学習が求められる。